

F-37 出稼および賃稼家庭における実態と問題点—十日町出稼と丹後賃稼の比較
大妻女大家政 飯田朝子

目的 我が国の在来産業は生産形態を家業に依拠している場合がほとんどである。家業はその生産活動を家庭内で家族労働力および準家族としての徒弟によって遂行された歴史を持ち、家庭が生産単位であると同時に生活単位にもなっていた。小論では家業の中で最も早くから独立した稼業を取り上げ、現状において資本主義的生産構造の末端部で稼働している出稼と賃稼について考察し、生産的稼働と家庭の本質を究明しようと試みた。

方法 昭和48～9年にわたり丹後と十日町の賃稼及び出稼家庭の実態を聞き取り調査によって行った。

結果 1 主婦が農業（又は漁業）、稼業、家事の三種類の労働を行っているが、稼得を目的とする稼業のための生産時間捻出のためにかねりの合理化が遂行されているであろうと想像していたのに反し、食生活の一部においてその努力がみられるに過ぎず、生活の場としての家庭の保持に主婦の努力目標が置かれていた。しかし就労条件の違う丹後賃稼においては、その目的が十分に果せない点で悩んでいた。

2 出稼・賃稼はそれを支配する商業資本との関連を無視できないが、家庭の自主性を尊重する十日町出稼の場合には巧妙な日本的支配様式を見出すことができた。

3 家業を持つ家庭の存在形態を通じて、家庭の本質が手段としての稼得目的と越えて生活目的を持つことが明らかにされた。